

旧約聖書の戦争に関する研究小史

佐々木 哲夫

はじめに

アメリカ合衆国のブッシュ大統領は、一九九一年一月に始まった湾岸戦争を「正義の戦争 (Just War)」と呼び、米国民の実に七四パーセントがその戦いを支持した。⁽¹⁾ さらに古くは、ベトナム戦争、第二次世界大戦での戦闘、一七一一世紀のアメリカ・インディアンとの戦い、一一世紀から一三世紀の十字軍においても、正義の戦争や神の御旨にかなう聖戦 (Holy War) が主張された。しかも、主張の根拠として、必ずと言ってよいほど、旧約聖書が引き合いに出された。⁽²⁾ 以上の事柄からも明らかのように、旧約聖書における「戦争」は、それぞれの時代における国際政治問題と密接に関係している今日の主題である。本稿は、旧約聖書の戦争の記事が、歴史的にどのような理解されてきたかを旧約学の研究史の視点から概観しようとして試みるものである。

「正義の戦争」から「聖戦」へ

戦うことに関し紀元一世紀のユダヤ人たちはどのように考えていたのか。まず始めに、イエス時代のユダヤ人の戦争観について当時の時代背景を考慮しながら概観する。

ローマ帝国のユダヤ支配は、一世紀のユダヤ人に政治のみならず文化的な危機をもたらした。例えば、徴税人のようにユダヤ律法の伝統を軽んじローマ政府の官吏になる者が出現した。また、悪しきヘレニズム化に独自の方策をもって対抗しようとした集団も少なからず現れた。例えば、神殿祭儀の維持に絶大な価値を置いたサドカイ派、社会から隔絶した共同体を死海のほとりに築き全ての律法を遵守しようとしたエッセネ派、エルサレム神殿ではなく各地域の共同体や各家庭に祭儀の中心を移行させ律法の実現を目指したパリサイ派、また、紀元前二世紀のアンティオコス・エピファネス時代のマカベア派による反乱を模範とし、武力闘争によって神の国の実現に参与しようとした熱心党などである。特に、熱心党は、戦いという視点から見ると、興味深い集団である。彼らの武力闘争路線の理念を支えたのは、例えば、ジムリと宿営に連れてこられたミディアン人の女を刺殺したピネハスの行動が神によって肯定されたという律法の記事（民数記二五章）であった。⁵³ 熱心党にとって戦いは、イスラエルの独立と神の国の実現のためであり、神の承認した戦いであった。現代の戦争の定義が、「戦争の主体は基本的には国家であって、戦争の特殊な形態である内戦においてさえも、政権奪取を狙う諸集団が互いに競い合いながら公権力と対峙する以上、国家はやはり戦いの中心軸を成している。戦争とは実に、国家の、国家による、国家のための武力対立を特徴とする暴力の発現形態である」⁵⁴ であるならば、ローマ植民地の小集団であった熱心党の戦いは、充分に組織化された指導体制を持たない過激派集団の単なる対ローマ抵抗運動であった。彼らを支えていたのは、ただ律法への熱情だけであ

った。そのような意味において、紀元七〇年のエルサレム神殿破壊や七三年のマサダ要塞におけるシカリ派（短剣党員）の劇的な玉砕も必然的結末であったと言えよう。一三三年のラビ・アキバとバル・コホバによる反乱の敗北も同じである。⁵⁵

他方、コンスタンチヌス帝のキリスト教公認（三一三年ミラノ勅令）以前の古代教会は、ローマ帝国による迫害の対象者であり、戦争遂行の主体者となることは全く無縁の存在であった。エウセビオス（二六〇年 三三九年）やテルツトリアヌス（一五〇年から一六〇年の間の生まれで二二〇年以降の没）の記事によれば、一七二年になって初めてローマ軍の中にキリスト教徒が存在したようである。興味深いことに、キリスト教徒の兵士の記述が現れると同時に、兵役を拒否する例も現れている。兵士がキリスト教に改宗した結果が、キリスト教徒が志願兵もしくは徴募兵となった故かは定かでないが、三世紀の後半にかなり多くの信徒兵士が存在したと考えられている。⁵⁶

古代教会の教父たちは、信徒の兵役に関し様々な記事を残している。例えば、リヨンの司教エイレナイオス（一三〇年頃 二〇〇年頃）は、『異端反論』の中で、イザヤ二章四節やミカ四章三節を引用しながら平和主義的精神を示しているが、それは、ローマのもたらす平和を前提とした、国家の警察的機能を認めた平和であった。ローマのヒツポリュトス（一七〇年頃 二三五／六年）は、二〇四年頃に著した『ダニエル書注解』において、ダニエル書七章の「第四の獣」をローマと認定し、ローマを完全に軽蔑の対象とした。彼は、兵役についている者が信徒になった場合に限って、殺人行為をしなければ軍隊に留まることを認めたが、新たに受洗した者が軍隊に入ることを否定した。また、アレキサンドリアのクレメンス（一四〇年から一五〇年の間の生まれで二一一年から二一五年の間の没）は、ユダヤ人が出エジプトの際にエジプトの財宝を奪った行為を是認し、指導者モーセを高く評価した。また、申命記二〇章五 七節を引用し、兵士としての士気を低めることのないようにとの理由で兵役の免除を語り、申命記二〇章一〇

節を引用しながら敵との和平をまず試みるよう主張した。彼は、戦争を悲惨なものと見なしたが、全く不法であり否定すべきものとは明言しなかった。⁽⁹⁾

教父の時代は、いわゆる「ローマの平和」の時代であり、その時代に兵役に服することは、既に樹立された平和の維持に貢献するためであった。やがて、コンスタンチヌス帝以降のキリスト教皇帝のもとで国家と教会が一体化すると、もともと宗教集団的性格を有していたローマの軍隊がキリスト教と融和したのは自然の流れであった。⁽¹⁰⁾ 例えば、アルル教会会議(三二四年)の決議で、「平時に武器を捨てる者は、聖体拝領から除外される」と定められている。現在この規定の解釈に關し様々な議論があるものの、この定めによってキリスト者兵士の軍籍離脱が困難になったことは明白である。⁽¹¹⁾ また、ローマの平和を、東方の歴史家エウセビウス(二六三年頃 三三九年)のみならず西方の教父ヒエロニムス(三四七年 四一九年)も旧約と新約の全ての平和主義の実現であると評している。⁽¹²⁾ 四世紀末にミラノの司教となったアンブロシウス(三三九年頃 三九七年)は、「戦争においては蛮人に対して祖国を防ぎ、国内においては弱者を守り、盗賊から同胞を保護する勇敢な行為は、まったく正義にほかならない」と論じた。⁽¹³⁾ 異教の野蛮な民からローマの平和を守る戦いは、古代教会にとって、まさに正義の行為であった。

以上概観したローマ帝国における正義の戦争の起源は、古代ギリシャにまで遡る。ギリシャでは、正義の戦争は、平和を維持する、もしくは、回復するための一つの手段であった。例えば、ギリシャの都市国家間の平和維持のために、調停、オリンピック競技、隣保同盟、デルフォイの神託などの方法が用いられたが、それらの後に位置する最後の手段が正義の戦争であった。正義の戦争という言葉はアリストテレスによって作られたものであるが、正義の回復のための戦いという戦い自体の概念は、既に、プラトンによって定義されていた。⁽¹⁴⁾ 後に、その概念は、キケロ(紀元前一〇六年 四三年)によってローマ帝国の倫理へと引き継がれた。キケロは、正義の戦争が国家の手で行われる

ことを主張した。即ち、ローマの平和の樹立とその維持のための正義の戦争を是認したのである。彼は、その戦争のおおまかな基準として、自己防衛、正当性、名誉をもって戦う、不必要に残酷であってはならぬ、不当な勝利は正当性を損なうなどの項目を挙げている。⁽¹⁵⁾ 以上のように、教会とローマ帝国の一体化によってさらに確実なものと認識されたローマの平和、および、それを維持するための正義の戦争が、古代教父たちの世界を支配していた歴史的政治的状况であった。

アンブロシウスが死んでから一三年後の四一〇年に、西ゴート族アラリックがローマを陥れ略奪する災厄が起きた。野蛮人は、ローマ帝国の敵であると同時にキリスト教信者を迫害する異端者でもあった。異端者によって侵略されたローマの平和を回復しそれを守るための正義の戦争が正当な行為と見なされたのは、ごく自然であった。このローマ帝国の危機の時代に生きたのが、アウグスティヌス(三五四年 四三〇年)である。アウグスティヌスは、好戦的な人物などではなく、多くの戦争を不正なものとしているが、徹底的な反戦を主張したわけではなかった。彼は、不正を罰するための正義の戦争を肯定した。即ち、この世には、正しい戦争と悪い戦争が存在し、信仰者は、平和を回復するための正しい戦争をなすべきであると説いた。⁽¹⁶⁾ 彼にとっての平和の回復とは、神との完全な関係の回復であった。⁽¹⁷⁾ 彼は、『神の国』で次のように記している。「知者に正しい戦争をなすことを余儀なくするのは、敵対する側の不正義である」(一九卷七章)。⁽¹⁸⁾ 「何らの戦争もないある種の平和はあるが、ある平和なしに戦争はありえない。戦争があることに従ってでなく、ある本性があることから、あるいはそのことにおいて戦争は起きる。このことはもし何らかの平和が存しないならば、決してないであろう。」(一九卷一三章)。⁽¹⁹⁾

正義の戦争を擁護するアウグスティヌスの最初の主張は、ヴァンセンティウスへの手紙の中に見られる。⁽²⁰⁾ アウグスティヌスは、出エジプト記三三章二七節を引用し、エジプトの王パロもモーセも同じようにイスラエルの民に苦

難を加えたが、動機において全く異なると論じた。即ち、パロの行った行為は独裁権力による人間的行為であったが、モーセは民の不信仰をただす正しい行為であったと論じた。彼の出エジプト記の解釈は、教会のドナティストへの迫害の根拠となった。神の国のための正義の戦争というアウグスティヌスの思想は、その後、いわゆる「聖戦」の思想へと発展してゆく。

一〇九五年のクレルモンの宗教会議において、ウルバヌス二世が聖地エルサレムを回教徒の手から奪還すると演説によって始められた十字軍は、中世の戦争を一変させた。十字軍の目的は、異教徒をキリスト教に改宗させようというのではなく、あくまでも、聖地の奪還であった。ある一定の基準に基づいて行なわれた正義の戦争の理念を十字軍にあてはめることは可能であろうが、しかし、厳密には、異なる戦いであった。換言するならば、十字軍は、侵略された平和を取り戻すために国家が主体となっていく正義の戦争ではなく、外国の管轄下にあるエルサレム巡礼の自由を悪魔である異教徒の手から奪還するために教会が主体となっていく信仰の戦いであった。十字軍の戦いは、まさに、神によって動機づけられた聖戦と呼ばれる戦いであった。そこでは、かつての正義の戦争では行なわれなかった残酷な殺戮が、いとも平然と行なわれた。当時好んで用いられた聖句は、エレミヤ書四八章一〇節「主のみわざをおろそかにする者は、のろわれよ。その剣をとどめて血を流さないようにする者は、のろわれよ」であったといふ。⁽¹⁹⁾

十字軍によって、古代ギリシャの哲学、特に、アリストテレス哲学のアラビア語訳からの翻訳がヨーロッパに紹介されたこともあり、スコラ哲学が勃興した。信仰の真理を理性によって合理的に体系化しようと試みたスコラ学者の一人が、トマス・アクィナス（一二二五年頃—一二七四年）であった。信仰も理性も神に由来するものであるから、両者は両立すると考えるアクィナスの神学は、人間の意志は神に向かって何らの働きをなすことはないと考えたアウグスティヌス神学と袂をわかすことになる。アクィナスの独自性は、出エジプト記三二章の解釈にも現われた。彼は、

モーセに与えられた神の言葉は、シナイ山麓での状況においてのみ有意なもので、モーセやレビ人たちの行為を後代の聖職者に適用することはできないと主張した。⁽²⁰⁾ 即ち、アクィナスによれば、平和は本来的に人間に備わっている理性の領域の問題であり、神からの特別な託宣を前提としないというのである。換言するならば、聖戦は存在しないのであり、存在するのは、むしろ、人間の理性的判断によって行う正義の戦争だけだということである。⁽²¹⁾

宗教改革者のルターやカルヴァンは、アウグスティヌスの理解に基づいて、戦争を、犯罪者の処罰であり平和の業と考えた。⁽²²⁾ 特に、カルヴァンの出エジプト記三二章に関する解釈は、レビ人の行為を神の意志を実現しようとした聖徒の業と見なし、聖戦論を積極的に復活させている。また、レビ人の役割を宗教改革者のそれと重ね合わせている。この点で、カルヴァンの解釈は、アウグスティヌスのそれよりも過激である。⁽²³⁾

以上概観してきたように、教父時代から宗教改革に至る時代には、旧約聖書の釈義の結果を土台にして戦争に関する議論を構築するよりはむしろ、各時代の戦争を神学的に肯定したり否定するために都合の良い旧約聖書の箇所が傍証として用いられたのである。旧約聖書の戦争の主題が、旧約聖書学や旧約神学の視座から論じられるのは、一九世紀を待たなければならなかった。

二、フォン・ラートの聖戦論

一九世紀に台頭してきた旧約聖書の批判的研究は、旧約聖書に記されている戦争の理解に新たな視座を与えた。クリウス・ヴェルハウゼン（一八四四年—一九一八年）は、イスラエルの戦争を、彼らの神聖な礼拝行為、また、イス

ラエル宗教の本質と考えた。即ち、「戦争と裁決とが それらが強制的な義務となり、国家的な制度となる以前は彼等の宗教であった」「この新たに燃やされた熱心の目標となったものは、バアル崇拜を破棄することではなく、イスラエルの敵と相争つ事であった」と記す通り、戦争行為自体がイスラエル宗教の自己目的であり、戦争は彼らの愛国心を満足させるものと考えた。⁽²⁴⁾ しかし、ヴェルハウゼンは、イスラエルの戦争についてそれ以上詳しい吟味を行なっていない。

現代旧約学の歴史において、旧約聖書の戦争を最初に詳しく論じたのが、F・シュヴァーリーである。彼は、出エジプト一四 一五章に記述されているようにイスラエルの国が戦争によって形成されたと考えるヴェルハウゼンの歴史観を支持し、さらに人類学の見地から検討を加えた。イスラエルは、人間生活の全要素が含まれる宗教発達の初期段階において、ヤーウエの主権を最も適切に表すために「戦争」という要素を選んだといっているのである。それ故、イスラエルの宗教を議論することは、イスラエルの戦争について議論することと同じと考えた。即ち、イスラエルの戦争は、実に、イスラエルの宗教そのものであると考えられたのである。さらに、シュヴァーリーは、イスラエルの戦争を契約の概念と結び付け、ヤーウエは、契約や共同体を守ってくれる守護神、即ち、戦士なる神 (Warrior God) であると考えた。「戦士なる神」の信仰は、アンフィクチオニー (宗教連合) の基盤だったといっているのである。イスラエルの戦いは、もはや、単なる人間の戦いなどではなく、神の戦い、即ち、聖戦と見なされた。イスラム教徒の用語ジハード (Jihad) の訳語であり旧約聖書には全く出現していない言葉「聖戦」をイスラエルの戦いに最初に適用したのが、このシュヴァーリーであった。⁽²⁵⁾

聖戦の主題をさらに吟味し発展させたのが、社会学者のM・ウエーバーである。ウエーバーによれば、ヤーウエは、イスラエルと契約 (Covenant) を締結した主体であり、また、イスラエルが契約連合体 (Covenantal Community) である以上、ヤーウエはイスラエルという契約社会全体を保護する保証人でもあったといふ。その意味において、ヤーウエは、イスラエル連合軍の眞の最高指揮官であり、それ故、戦争は、単なる政治的な出来事ではなく、宗教的事象であり、まさに祭儀そのものであると考えられた。ウエーバーは、王国成立以前の戦争においては、カリスマを帯びたナジル人、デボラ、サムエルなどの指導者が実際の戦争遂行の指導者であったが、王国成立後は、軍事的な訓練を受けた王直属の軍隊が戦争を遂行することによって、カリスマを帯びたエクスタティックな預言者は非軍事化され、戦争遂行の実質的指導者となる可能性がなくなつたと考えた。それ故、ウエーバーは、王国時代の預言者を、王国の行う官僚的な政治や戦争を批判しつつ、伝統的な方策をもう一つ別の選択肢として提示する勢力だったと想定した。⁽²⁶⁾

ここまでの研究は聖戦が中心であったが、H・フレデリックソンは、旧約聖書が提示する戦士なる神という姿に注目して研究を行った。即ち、旧約聖書は、ヤーウエを、一方では、イスラエルの軍隊を動かす指揮官、また、預言者の時代には敵の軍隊を動かす指揮官として描き、他方では、敵や自然など様々な手段を用いて一人で戦う戦士として描いていることに注目した。フレデリックソンは、戦士なる神という姿を捕囚期におけるバビロニアからの影響と考え後代に時代を設定した。また、戦士なる神の姿は、時代に応じて変化する一般的な神概念によって規定されたとも考えた。それ故、彼にとつての問題は、戦士なる神の概念がイスラエルの歴史や社会とどのように関連していたかであった。⁽²⁷⁾

以上のヴェルハウゼン、シュヴァーリー、ウエーバー、フレデリックソンらの聖戦論が、少なからず、フォン・ラートの聖戦論へ影響を与えたのである。フォン・ラートは、聖書の戦争記事を様式批評的に分析し、それを彼の五書批評の立場、いわゆる、「六書説」の枠組みの中で伝承史的に再構成した。それ故、われわれは、フォン・ラートの聖戦論を様式と伝承といふ二つの側面から概観して行く。⁽²⁸⁾

フォン・ラートは、旧約聖書に描かれている戦争には、幾つかの共通する基本的な要素が備わっており、それが聖戦の類型を構成していると考えた。そして、聖戦の要素として下記の項目を挙げた。⁽²⁹⁾

(一) ラツパの音による招集と軍隊の形成

兵士の招集を告げるためにラツパが吹き鳴らされる。積極的な参加が奨励された。各部隊が集合し、結果してゆく。宿営に集合した部族連合の軍勢は、「主の民」と呼ばれ、宗教的な秩序のもとに置かれた。

(二) 兵士の聖別

兵士たちは身を清め、女性から身を遠ざけ、誓願を立てた。宿営全体が、主の現臨の場であるが故に、清くあらねばならなかった。武器もまた清められた。招集された兵士たちが、部隊を組織し、戦いの準備をしている時に敵の攻撃を受けた場合、全軍が、悔い改め、嘆きの声を上げた。戦いのために犠牲を捧げ、主からの託宣を待った。

(三) 神による勝利の約束の宣告

神の言葉に基づいて、指揮官は、「ヤーウエは、敵をわれわれの手に渡した」と定型的な宣告をなす。この宣告は、未来形ではなく過去形で表現される。この宣告によって、勝利に対する不動の確信が与えられる。

(四) ヤーウエの先導とイスラエルの全き勝利の確信

敵を目指して前進する兵隊たちを、ヤーウエが先導する。ヨシユア記三章一一節では、主の契約の箱が先頭に立っている。戦いに必要とされているのは、武装の準備や兵士の数などではなく、確固とした勝利への確信、戦意の高揚であった。この戦いは、主の戦いであり、戦う相手は主の敵であった。イスラエルは恐れてはならず、信仰を堅持しなければならぬ。対照的に、敵は、主を恐れて戦意を喪失する。

(五) 戦闘

時の声を挙げることによって戦闘が始まる。戦闘自体の様子はそれぞれの場面によって異なるが、共通していることは、主が介入し、敵の中に恐れを生じさせるといふ点である。

(六) 勝利後の聖別

聖戦の終結の頂点は、聖絶と呼ばれている祭儀行為である。人間や家畜は根絶やしにされ、金銀などの財宝は主のために聖別される。

(七) 軍隊の解散

聖戦は、「イスラエルよ、各々の天幕に帰れ」という命令によって終了する。しばしば、「めいめい自分の天幕に帰った」という完了形の定型句で軍隊の解散が表現される。

以上のように、フォン・ラートは、聖戦をかなり祭儀的に規定し類型化している。そして、聖戦を彼独特の六書成立の史観と密接に関連させ、聖戦の伝承過程を再構成している。即ち、いわゆる「最古の信仰告白(申二六・五b 九、六・二〇 一四、ヨシ二四・二b 一三)」を抽出し、それが出エジプトと土地取得伝承全体を構成する核であったと考え、この伝承の起源として聖所ギルガルで祝われた七週の祭りの祭儀を想定した。また、「最古の信仰告白」で言及されていないシナイの出来事については、別の独立した祭儀伝承であるシナイ伝承を想定し、この伝承の起源として聖所シケムで祝われた秋の仮庵祭における契約更新式の祭儀を想定している。また、彼は、土地取得伝承とシナイ伝承を神学的動機をもって結合させた一人の人物を想定し、ヤーウエストと名付けた。このヤーウエストが、族長物語と天地創造の物語である原初史を付加し、父祖に与えられた約束がカナンの土地取得によって成就されたという救済史を主題とした文学の全体枠を完成させたと考えた。以上のように、祭儀的な聖戦のいわゆる「生活の座」として、ヤーウエへの信仰と祭儀を基盤とした士師時代のいわゆるアンフィクチオニーによる部族連合国家が行った防

衛戦争を想定したのである。

王国時代になり、軍隊が職業軍人による新組織へと改変されてゆくと、戦争自体の意味も変化した。特に、ソロモン時代の戦争は、士師時代の祭儀に基づいた聖戦などではなく、「ソロモンの人間主義」による政治的な戦いであったと考えられた。フォン・ラートによれば、預言者とは、信仰的に崩壊しつつあった王国時代の聖戦を批判し、士師時代のようなヤーウエ信仰に基づいた聖戦を再主張した者たちであったという。

しかし、聖戦が士師時代の祭儀的制度であると考えられるならば、なぜ、聖戦に関する規定が申命記だけにしか見いだされないのか。この問いに対し、フォン・ラートは、申命記の担い手をレビ人と考え、その伝承の起源を北王国にあるとし、原申命記の伝承がヒゼキヤ時代に北王国滅亡と共に南ユダへ逃亡してきたレビ人によってもたらされたと解答した。やがて、ヨシヤ王の宗教改革によって、レビ人の持ち込んだ原申命記が発見されると、申命記記者たちは、士師時代の聖戦を、王国時代の祭儀と結び付け、聖戦を宗教戦争として新しく位置づけ、カナン宗教との戦いの場面として描いたというのである。即ち、申命記の成立を王国時代に想定したのである。⁽³⁾

三、フォン・ラート以後

いわゆるアンフィクチオニーを背景とした部族全体による祭儀的制度として聖戦を理解するフォン・ラートの説に反対したが、R・スメントである。スメントは、アンフィクチオニーが祭儀的連合であり、政治や軍事的なものではないと結論づけ、「聖戦」ではなく「ヤーウエ（主）の戦い」の名称の方が適切であると主張した。スメントの議論

は、M・ノートのアンフィクチオニー説を援用したものである。即ち、アンフィクチオニーは、元来、レアの子孫である六部族間の祭儀的同盟であり、部族連合にヤーウエの戦いを導入したのは、出エジプトにおいてヤーウエの戦いを経験したラケルの子であるヨセフとベニヤミンの子孫の部族であると論じた。⁽³⁾

他方、M・ワイベルトは、古代オリエントの資料を用い、イスラエルに独特であるとフォン・ラートが主張した聖戦と同じ要素や思想を、イスラエルの近隣諸国の戦争に見出した。例えば、アッシリアのアサルハドドン王の報告（紀元前六七二年）や紀元前一八世紀に地方長官バハディ・リマがマリの王チムリ・リムに宛てた手紙などに、祭儀的な誓願、神への恐れによる戦意喪失、一方的な勝利、象徴的な行為による軍隊の召集、敵を王の手に渡す「降伏定式」、軍旗や神の先行など聖戦の諸要素が見られると指摘した。これは、聖戦が旧約聖書に記されている独特な戦争ではなく、古代オリエントに共通の戦争イデオロギーであることを示すものであった。⁽³⁾

フォン・ラートの聖戦論に対しては、さらに、N・K・ゴットウォールドも総括的に批判している。ゴットウォールドによると、聖戦は、異教徒を改宗させる目的で行われたイスラムのジハードと全く異なるもので、士師の時代における緩やかな部族連合のゲリラ的防衛戦であり、また、王国時代における宣戦布告に基づいた王による国家的戦いであったと分析している。彼は、聖戦を、元来は、正義による国家形成と侵略者からの防衛のための戦いであったと宗教社会的見地から理解している。⁽³⁾

近年、S・ニーデッチは、フォン・ラートが聖戦の頂点と終結をなす要素であると分析した聖絶の用例を再吟味し、下記に示す七種類に類型化した。彼女は、聖絶を、フォン・ラートの定義した固定的な聖戦観に収まるものではなく、むしろ、多様な戦争イデオロギーを代表するものと考えた。⁽³⁾ ニーデッチの類型化した戦争イデオロギーは、下記の通りである。

(一) 神への捧げ物としての聖絶

民数記二二章一三節に見られるように、戦争の勝利を確かなものとするために神に対し捧げられた聖絶である。この聖絶のイデオロギーは、王国成立以前の小部族の指導者が持っていたと想定されるが、王国時代にも引き継がれ、イザヤ三四章が形成された時代まで継承されたと考えている。⁽³⁵⁾

(二) 神の正義としての聖絶

申命記一三章一一一八節に見られるように、罪人である敵が不正義を行なっていることに對し、神の正義を實踐するイスラエルが神の代理者の立場で彼らを罰した戦いであるという。このイデオロギーは、戦争が現実に生じた古い時代。その時代にもこのような正義の戦争理念は無論のこと存在したであろうが、ではなく、そのような戦争を文書化した紀元前七世紀に特徴的なイデオロギーであると分析されている。この推定の背後には、ニーデッツの前提としている申命記史家の神学が前提とされている。⁽³⁶⁾

(三) 祭司の戦争イデオロギー

民数記三二章に見られるように、祭司、司令官、兵士、市民などの階層が確立されていた社会によって行なわれた組織的な戦争である。これは、申命記のカナン占領の戦争記事よりは、祭司文書や紀元前一世紀のクムランの『戦いの書』に見られる戦争と共通していると考察されている。⁽³⁷⁾

(四) 吟誦によって伝承された戦争

サムエル記第一の二七章に見られるような美しい口承形式で描かれた戦争記事では、英雄的勇者が語られている。例えば、ダビデやゴリアテなどの勇者の登場、そして、あざけりの言葉に続く格闘の内容は、戦争というよりはゲームやスポーツのような騎士道精神が強調されたものと評価されている。ニーデッツは、このイデオロギーの時代背景

として、申命記史家の時代、特に、王国初期のダビデ時代であると想定している。⁽³⁸⁾

(五) 術策のイデオロギー

創世記三四章に見られるように、戦争を有利に遂行するために、欺いたり罠をかけたたりする戦術を用いる場合である。それは、サムソン、ヤエル、エフデなど士師たちの戦いに散見でき、宮廷というよりは庶民のイデオロギーと考えられている。それ故、この類のイデオロギーは、政治的、経済的、文化的抑圧に虐げられた時代には、いつでも出現すると想定されている。⁽³⁹⁾

(六) 功利主義的イデオロギー

士師記九章に見られるように、一度戦争が起きたならば、全ては、その勝利のために動き始める。術策のイデオロギーとは対照的に、功利主義的イデオロギーは、攻撃であれ防衛であれ、軍事的目標の達成のためには殺戮をいとわないという戦争である。古代オリエント世界の指導者たちのように、このタイプの戦争は、政治的指導者によって職業的に遂行される。申命記史家によって記された功利主義的イデオロギーの戦争は、歴史誌史家によって批判されたと分析している。⁽⁴⁰⁾

(七) 神の奇跡的介入のイデオロギー

イザヤ書二二章四節、ミカ書四章三節、アモス書一二章、歴史誌などに見られるように、神の奇跡的介入によって戦争が終結されるといふイデオロギーである。ただし、これは、「終わりの日」の出来事に関する預言の文脈の記述である。人々はもはや戦いをせず、かわりに、神が敵と戦ってくれるというのである。これは、戦いが存在しないという意味での平和主義とは異質の主張である。⁽⁴¹⁾

このニーデッツの研究は、聖絶を固定化された聖戦の特徴的な要素と想定するフォン・ラートの考え方の誤りを明

らかにしてはいるが、これら提起された七つの戦争イデオロギーとイスラエル史、特に、旧約聖書正典史との関係、各イデオロギー間の相互関係について、さらに神学のみならず倫理学の視点から体系的に論述する必要がある。

他方、六〇年代以降のハーバード大学の旧約学者たちも、主の戦いの主題を取り扱った。オールブライトの弟子で六〇年代から八〇年代までハーバードで教鞭をとったF・M・クロスは、詩篇の形式やヤウエの宇宙論的戦争に注目した。クロスによれば、聖戦のイデオロギーによって、出エジプトとカナン占領を再現する祭儀（Ritual Conquest）が、王国時代や黙示文学において特徴的な「創造と王権」の主題と融合されたと考えた。そして、この融合から後期預言や初期の黙示終末論（proto-apocalyptic eschatology）が生まれたと考えた。即ち、「主の曰」は、主の祭りの曰であり、その日に、カナン占領を再現する祭儀が演じられたと想定した。他方、再占領（Second Conquest）とも呼び得る光の子と闇の子の戦い、カオス（混沌）という悪の勢力を凌駕し新しい天と地を創造するといつ神の国の実現の思想をも取り入れた。つまり、聖戦という歴史的な主題と神話的な主題の融合によって、黙示的終末論が生み出されたと考えたのである。⁽⁴²⁾ このようなクロスの主張は、その後、彼の弟子たちであるP・D・ミラー、⁽⁴³⁾ D・L・クリステンセン、⁽⁴⁴⁾ D・シュツアート、⁽⁴⁵⁾ P・D・ハンソン⁽⁴⁶⁾ らによって展開された。

例えば、ハンソンによれば、出エジプトの出来事の中で明らかにされた神の正義と神の慈愛がバランスを保って成立する社会、即ち、正義にこだわり過ぎて社会が硬化化することもなく、また、逆に、慈愛が甘えに墮落することもない社会は、出エジプトによって明らかにされた主のもう一つの属性である主の至上主権において維持されるという。つまり、礼拝によって、主の主権が現実的な生々の場において具現化されるというのである。ハンソンは、神の正義と慈愛によって実現された原初的な生々の理念を表現する言葉として「シャローム」を理解する。また、このシャロームの対義語が、「ミルハマー（戦争）」ではなく、むしろ、シャロームの欠如状態（カオス状態）と定義すべきと説く。

聖絶に代表される聖戦イデオロギーは、土地取得時代に根を持つのであるが、実際には、申命記史家による神学的構成物であると考えられたのである。それ故、王国時代の戦争は、帝国主義的イデオロギーによるカオスであり、預言者の批判するところとなったと分析した。さらに、捕囚期において、このカオスに逆戻りすることのない神の正義と慈愛と礼拝の回復という神による新しい創造が黙示として幻視されたと論じている。⁽⁴⁷⁾

また、聖戦論は、非戦を唱えるメノナイト派の学者たちにとっても重要な主題であった。特に、リンドは、聖戦が、歴史的出来事であり、神が奇跡的に介入し、勝利へと導いてくれた戦いであると論じた。換言するならば、聖戦は、人間の戦いではなく神の戦いと考えたのである。⁽⁴⁸⁾

さらに最近、ロングマンとライドは、聖戦を、旧約聖書と新約聖書の全体枠の中で考察している。聖戦は、理想的には、忠実なイスラエルに代わって主が戦ってくれる戦いのことであるが、イスラエルの不信仰の故に、主はイスラエルの敵となってしまった。王国時代に預言者が戦士なる神の代理人として活動するが、イスラエルに敵対する神は捕囚という結果をもたらした。旧約聖書の黙示の告げる未来の宇宙的な戦い、例えば、歴史を越えた次元における神と海（カオス）との戦いのモチーフは、バアル神話やエヌマ・エリッシュにも見られると論じている。そして、聖戦のモチーフが新約聖書においてどのように引用され適用されているかを論じている。⁽⁴⁹⁾

おわりに

以上概観したように、旧約聖書の戦争、特に、聖戦の問題は、倫理と神学の二つの側面から考察されてきた。

戦争を倫理問題として考察する時、すぐに連想されるのが十戒の中の第六戒「殺してはならない」の言葉である。シユタムとアンドリュウは、「 \times 」が、戦争の場合の敵の殺戮や神の裁きのもとに服した人間の絶滅には用いられておらず、個人的な仇敵の殺害や故殺の場合に限って使われているという用例を根拠に、「 \times 」を反共同体的な不法な殺害を意味する言葉と解した。⁽⁵⁰⁾ 他方、クレイギは、第六戒を戦争と死刑に適用できないことを基本的に容認しつつも、そこに人間の生命への畏敬の原理が含蓄されていると解し、第六戒の解釈は、現代社会において戦争を宗教的に容認するものではないと論じた。⁽⁵¹⁾ このように、十戒の第六戒は、戦争の絶対的禁止を明確に表現している章句とは言えないが、戦争自体が故意に人を殺す行為であるが故に、戦争否定の原理を内包していると言える。

そこで、次に問題とされるべきは、旧約聖書と正戦論や聖戦論がどのようにかかわっているかである。即ち、旧約聖書の戦争記事をそれぞれの時代の戦いの根拠に適用できるかとの問題である。これは、既に考察したように、教父以来議論されてきた問題である。ここで気にかかる事は、旧約聖書の釈義と適用との間に少なからぬ飛躍がしばしば見られる事である。例えば、W・C・カイザーは、正義の戦争の正当性の根拠として出エジプト三三章の釈義に関するアウグスティヌスやカルヴァンの解釈の立場を棄却し、適用は妥当性を欠くと論じたトマス・アクィナスの立場を支持した。カイザーは、一方において、出エジプト三三章の釈義からは正義の戦争の根拠が導かれないと議論しながら、他方では、アメリカ合衆国の今日的問題に触れる時、防衛のための正義の戦争を認め、ソビエトがハンガリーに侵攻した時に何もなかったアイゼンハワー大統領を批判している。⁽⁵²⁾ ここに、湾岸戦争時に主張された正義の戦争論と相通する欧米固有の正戦論を垣間見たような気がする。即ち、ある種の価値基準が解釈以前に前提とされているのではなからうか。聖書を議論の土台とする場合には、そのような前提は排すべきである。反対に、ある種の平和主義が解釈の前提となって作用し、解釈全体を支配することも排除すべきである。旧約聖書を新約聖書の光の

中で解釈するとの考えもあるが、まず始めは、旧約聖書を旧約聖書の文脈の中で解すべきと考える。ここで、論点は、倫理問題から神学問題へと移る。

旧約聖書の戦争は、既に概観したように、創造、王権、終末論などの主題、また、契約、宮廷、預言者、黙示などの伝統との関連で研究されてきた。さらに、古代オリエントとの関連も吟味された。もはや、旧約聖書の戦争は、フォン・ラートの聖戦論のような単純な理論では解決し得ない包括的な主題となっている。

今後、旧約聖書の戦争の主題を取り扱う際に整理しておくべきことは、研究の方法論であろう。どのような方法論を土台として、旧約聖書の戦争問題を分析し、評価しようとしているのか。フォン・ラートがヴェルハウゼン以来の祭儀的立場を踏襲して聖戦論を構築したように、ある神学的立場を前提とするのではなく、共時的な見地から旧約聖書本文を吟味する、換言するならば、様式 (Form) と内容 (Content) に注目して本文を吟味するという基礎的な旧約研究が、再びというよりは、むしろ新たに必要とされているのではなからうか。⁽⁵³⁾ また、フォン・ラートの聖戦論のように、旧約聖書の戦争を神学問題の枠内においてのみ考察するのではなく、さらに、それを倫理問題として考察すべきであろう。クレイギが試みたように旧約聖書の戦争を神学問題、倫理問題として総合的に取り扱うことによって今日の意味を問う必要がある。そして、そのような思索によって、我々のうちに新たな戦争理解、もしくは、平和理解が構築され、新約聖書の真理と共に現代の戦争を理解するための倫理の光が与えられると考える。

注

(1) 日本経済新聞社編『宗教から読む国際政治』(日本経済新聞社、一九九二年)一五九—一七〇頁、会田弘繼『戦争を始めるのは誰か』講談社文庫一

- 一八四(講談社、一九九四年)一九三-一九六頁。
- (2) Peter C. Craigie, *The Problem of War in the Old Testament* (Grand Rapids: Michigan: Eerdmans, 1979), pp. 33-34. [『戦争と平和』旧約聖書における戦争の問題。(カブ書房、一九九〇年)] Susan Niditch, *War in the Hebrew Bible* (N.Y.: Oxford Univ. Press, 1993), pp. 3-4. Roland H. Bainton, *Christian Attitudes Toward War and Peace: A Historical Survey and Critical Re-evaluation* (Nashville: Abingdon Press, 1960), pp. 44-46. [ローレンツ・H・バイントン『戦争・平和・キリスト者』(新教出版社、一九六三年)]
- (3) John Riches, *The World of Jesus: First-Century Judaism in Crisis* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1980), pp. 49-107. [ジョン・リッチェス『イエスが生きた世界 危機に直面する一世紀のユダヤ教』(新教出版社、一九九六年予定)]
- (4) 猪口邦子『戦争と平和』(東京大学出版会、一九八九年)八頁。
- (5) 石田友雄『ユダヤ教史』世界宗教史叢書四(山川出版社、一九八〇年)二〇-二三三頁。
- (6) 大木廉太『古代キリスト教と平和主義(一) キリスト教公認(三三三年)までの信徒兵士の実態』『茨城キリスト教大学紀要』第一六号(一九八二年)二一-三四頁。荒井献『初期キリスト教における非戦の思想』『同伴者 イエス』(新地書房、一九八五年)三三八-三五九頁。
- (7) 大木廉太『古代キリスト教と平和主義(三) 教父における軍隊・兵役の問題』『茨城キリスト教大学紀要』第一八号(一九八四年)一一-一七頁。
- (8) ジェームス・L・ジョンス『ローマの軍隊』『原始キリスト教の背景としてのローマ帝国』(教文館、一九八九年[一九七一年])二九-一頁。
- (9) 宮田光雄『平和の思想的探究』(創文社、一九七八年)四五-四六頁。
- (10) Bainton, *Christian Attitudes*, pp. 86-88.
- (11) 宮田光雄『平和の思想的探究』四八頁。
- (12) Bainton, *Christian Attitudes*, pp. 37-39. [バイントン『国家』(玉川大学出版部、一九八二年)八七-一五〇頁。
- (13) Bainton, *Christian Attitudes*, pp. 41-42. [『ヘルシマン』他『古代のキリスト教徒と軍隊』(教文館、一九八八年[一九八五年])二二-二〇頁。
- (14) アウグスティヌス『神の国』アウグスティヌス著作集第一四巻(教文館、一九八〇年)三三頁。
- (15) フランシスコ・ソレス『アウグスティヌスの戦争論』(中世思想研究)第二七号(一九八五)三八-三九頁。村田充八『キリスト教における戦争と平和(一)』(阪南論集・人文自然科学編、第二九巻三号(一九九四年)一〇三-四頁。
- (16) アウグスティヌス『神の国』アウグスティヌス著作集第一五巻(教文館、一九八三年)四九頁。
- (17) アウグスティヌス『神の国』アウグスティヌス著作集第一五巻(教文館、一九八三年)六一頁。
- (18) *The Works of Aurelius Augustine, Bishop of Hippo: The Letters of Saint Augustine*, vol. 1, (Edinburgh: T. & T. Clark, 1872), p. 400. Michael Walzer, "Exodus 32 and the Theory of Holy War: The History of a Citation," *Harvard Theological Review* 61 (January 1968), pp. 5-8.
- (19) Bainton, *Christian Attitudes*, pp. 109-116. Craigie, *The Problem of War*, pp. 27-28.
- (20) Walzer, "Exodus 32", pp. 8-11.
- (21) Walzer, "Exodus 32", pp. 10-11. Bainton, *Christian Attitudes*, pp. 108-109. M. C. Cairns は、マクナスの解釈の方がアウグスティヌスのそれよりも旧約聖書の範囲に合うと認識している。Walzer C. Kaiser, Jr., *Toward Old Testament Ethics* (Grand Rapids: Michigan: Academic Books, 1983), p. 175.
- (22) 岡田光雄『平和の思想的探究』五四-五九頁。村田充八『キリスト教における戦争と平和(一)』『阪南論集・人文自然科学編』第二九巻三号(一九九五年)一一五頁。
- (23) Walzer, "Exodus 32", pp. 11-12. Kaiser, *Toward Old Testament Ethics*, p. 175. Craigie, *The Problem of War*, p. 27.
- (24) J. Wellhausen, *Prolegomena to the History of Ancient Israel* (1885; reprint, Atlanta: Scholars, 1994), -----, *Israelitische und jüdische Geschichte* (Berlin: de Gruyter, 1927), 26. 『ユスハル』(新地書房) [Abriss der Geschichte Israels und Judas] (鎌井敏、一九三三年[一九八四年]) 三三三-五七頁。
- (25) Frederick Schwally, *Der heilige Krieg im alten Israel* (Leipzig: Dietrich, 1901). Ben C. Ollenburger "Introduction: Gerhard von Rad's Theory of Holy War," in G. von Rad, *Holy War in Ancient Israel* (Grand Rapids: Eerdmans, 1991 [1988]), pp. 4-6.
- (26) Ollenburger "Introduction," pp. 6-9. [バイントン『古代ユダヤ教』(新地書房、一九六二年[一九二二年])一五二-一三三頁。
- (27) Ollenburger "Introduction," pp. 11-12. Henning Fredriksson, *Jahwe als Krieger: Studien zum alttestamentlichen Gottesbild* (Lund: Gleerup, 1945).
- (28) Gerhard von Rad, *Holy War in Ancient Israel* (Grand Rapids: Eerdmans, 1991 [1958]), pp. 41-134.
- (29) von Rad, *Holy War*, pp. 41-51.
- (30) von Rad, *Holy War*, pp. 41-134. Ollenburger "Introduction," pp. 12-22. 『ユスハル』(新地書房) [Abriss der Geschichte Israels und Judas] (鎌井敏、一九三三年[一九二二年])一五二-一三三頁。

五頁。左近淑「五書の成立」『聖書講座』第一巻（日本基督教団出版局、一九六五年）三三〇-三三三頁。R・E・クレメンツ『近代旧約聖書研究史』（教文館、一九七八年）四一-四四頁。G・フォーン・ブート『旧約聖書の様式史的研究』（日本基督教団出版局、一九六九年）。平野節雄「旧約旧約の『戦争』の理解をめぐって」『基督教研究』第三二巻一-二期（一九七四年）五八-七八頁。

(31) Rudolf Smend, *Yahweh War and Tribal Confederation: Reflections upon Israel's Earliest History* (Nashville: Abingdon, 1970 [1966]), Ollenburger "Introduction," pp. 22-24.

(32) Manfred Weippert, "Heiligkrieg' in Israel und Assyria," *Zeitschrift für alttestamentliche Wissenschaft* 84 (1972): 460-93. Ollenburger "Introduction," pp. 24-25. 平野節雄「旧約旧約の『戦争』の理解をめぐって」六八-六九頁。

(33) N. K. Gottwald, "Holy War," *Interpreter's Dictionary of the Bible, Supplement* (1976): 942.

(34) Niditch, *War*, pp. 28-155.

(35) -----, *War*, pp. 28-55.

(36) -----, *War*, pp. 56-77.

(37) -----, *War*, pp. 78-89.

(38) -----, *War*, pp. 90-105.

(39) -----, *War*, pp. 106-122.

(40) -----, *War*, pp. 123-133.

(41) -----, *War*, pp. 134-149.

(42) F. M. Cross, *Canaanite Myth and Hebrew Epic* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1973), pp. 91-111.

(43) P. D. Miller, Jr., "Fire in the Mythology of Canaan and Israel," *Catholic Biblical Quarterly* 27 (1965): 256-61.

(44) D. L. Christensen, *Transformations of the War Oracle*. Harvard Dissertations in Religion (Missoula, Mont.: Scholars, 1975).

(45) D. Stuart, "The Sovereign's Day of Conquest," *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 221 (1976): 159-64.

(46) P. D. Hanson, *The Dawn of Apocalyptic* (Philadelphia: Fortress, 1975).

(47) P. D. Hanson, "War and Peace in the Hebrew Bible," *Interpretation* 38 (1984): 341-362. [「旧約聖書旧約の戦争と平和」『ペンタトネウタム』巻四 卅（一九八三年）頁 四〇四頁]

(48) V. Ellor, *War and Peace from Genesis to Revelation* (Scottsdale, Pa.: Herald, 1981), J. H. Yoder, *The Original Revolution: Essays on Christian Pacifism* (Scottsdale, Pa.: Herald, 1977), -----, "To Your Tents, O Israel: The Legacy of Israel's Experience with Holy War" in *Studies in Religion/Sciences Religieuses* 18 (1989): 345-62., M. C. Lind, *Yahweh Is a Warrior* (Scottsdale, Pa.: Herald, 1980).

(49) Temper Longman III and Daniel G. Reid, *God Is a Warrior*. Studies in Old Testament Biblical Theology (Grand Rapids: Zondervan, 1995).

(50) J. J. Stamm and M. E. Andrew, *The Ten Commandments in Recent Research* (London: SCM Press, 1967), pp. 98-99. [『十戒』(藤森丑次郎、一九七〇年)]

(51) Craigie, *The Problem of War*, pp. 55-63.

(52) Kaiser, *Toward Old Testament Ethics*, p. 178.

(53) D. J. A. Clines and J. C. Exum, "The New Literary Criticism," *The New Literary Criticism and the Hebrew Bible* (Sheffield: JSOT Press, 1993), pp. 11-24.

注記と参考文献

Aho, James A. *Religious Mythology and the Art of War: Comparative Religious Symbolisms of Military Violence*. Westport, CT: Greenwood Press, 1981.

Benedict, Marion J. *The God of the Old Testament in Relation to War*. New York: Columbia University, 1927.

Brekelman, C. H. W. "Herem, Barn." In E. Jenni and C. Westermann, eds. *Theologische Handwörterbuch zum Alten Testament*, 1: 635-39. Munich: C. Kaiser, 1971.

Collins, J. J. "The Mythology of Holy War in Daniel and the Qumran War Scroll: A Point of Transition in Jewish Apocalyptic." *Vetus Testamentum* 25 (1975): 596-612.

Conrad, E. W. *Fear Not Warrior: A Study of the 'al tira' Pericopes in the Hebrew Scriptures*. Brown Judaic Studies, vol. 75. Chico, Calif.: Scholars, 1985.

Craigie, P. C. "Yahweh Is A Man of Wars." *Scottish Journal of Theology* 22 (1969): 183-88.

-----, "War, Religion and Scripture." *Bulletin of the Canadian Society of Biblical Studies* 46:3-13.

- de Vaux, Roland. *Ancient Israel*. N.Y.: McGraw-Hill, 1961. (2247-267).
- Enz, Jacob. J. *The Christian Warfare: The Roots of Pacifism in the Old Testament*. Scottdale, PA: Herald Press, 1972.
- Fish, T. "War and Religion in Ancient Mesopotamia." *Bulletin of the John Rylands Library of Manchester* 23 (1939): 387-402.
- Good, R. M. "The Just War in Ancient Israel." *Journal of Biblical Literature* 104 (1985): 385-400.
- Gottwald, Norman. "Holy War in Deuteronomy: Analysis and Critique." *Review and Expositor* 61:297-310.
- Hanson, Paul D. "War, Peace, and Justice in Early Israel." *Biblical Review* 3 (1987):32-45.
- Hobbs, T. R. *A Time For War. A Study of Warfare in the Old Testament*. Wilmington, Delaware: Michael Glazier, Inc. 1989.
- Johnson, James Turner. "Historical Roots and Sources of the Just War Tradition in Western Culture." In John Kelsey and James Turner Johnson, eds. *Just War and Jihad*. 3-30. 1991.
- Jones, G. H. "Holy War" or "Yahweh War." *Vetus Testamentum* 25 (1975):642-58.
-----, "The Concept of Holy War." In *The World of the Old Testament*, 299-322. Ed. R. E. Clements. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1989.
- Kang, S.-M. *Divine War in the Old Testament and in the Ancient Near East*. New York: Walter de Gruyter, 1989.
- Kelsey, John and James Turner Johnson, eds. *Just War and Jihad: Historical and Theoretical Perspectives on War and Peace in Western and Islamic Traditions*. New York/Westport, CT: Greenwood, 1991.
- La Barbera, Robert. "The Man of War and the Man of God: Social Satire in 2 Kings 6:8-7:20." *Catholic Biblical Quarterly* 46 (1984):637-51.
- Lilley, J. P. U. "Understanding the Herem." *Tynode Bulletin* 44 (1993) : 169-77.
- Little, David. "Holy War Appeals and Western Christianity: A Reconsideration of Bainton's Approach. In John Kelsey and James Turner Johnson, eds. *Just War and Jihad. Historical and Theoretical Perspectives on War and Peace in Western and Islamic Traditions*. 1991.
- Longman III, T. "Psalm 98: A Divine Warrior Victory Song." *Journal of the Evangelical Theological Society* 27 (1984): 267-74.
- Malamat, Abraham. "The Israelite Conduct of War in the Israelite Conquest of Canaan." In *Symposium: Celebrating the Seventy-Fifth Anniversary of the American Schools of Oriental Research (1900-1975)*. Philadelphia: American Schools of Oriental Research, 35-56.
- Miller, P. D. "The Divine Council and the Prophetic Call to War." *Vetus Testamentum* 18 (1968): 100-107.
- Moran, W. L. "The End of the Unholy War and the Anti-Exodus." *Biblica* 44 (1963): 333-342.
- Rad, G. von. "The Origin of the Concept of the Day of Yahweh." *Journal of Semitic Studies* 4 (1959): 97-108.
- Ramsey, P. *The Just War. Force and Political Responsibility*. Lanham, Md./New York/London:University Press of America, 1988.
- Rofe, Alexander. "The Laws of Warfare in the Book of Deuteronomy: Their Origins, Intent, and Positivity." *Journal for the Study of the Old Testament* (1985) 22:23-44.
- Schmidt H. H. "Heilige Krieg und Gottesfrieden im alten Testament." In *Altorientalische Welt in der alttestamentlichen Theologie*, 91-120. Ed. H. H. Schmidt. Zurich: Theologischer Verlag, 1972.
- Soggin, J. A. "The Prophets on Holy War as Judgement against Israel." In *Old Testament and Oriental Studies*. Ed. J. A. Soggin, 67-81. *Biblica et orientalia* vol. 29. Rome: Pontifical Biblical Institute, 1975.
- Stern, Philip D. *The Biblical Herem. A Window on Israel's Religious Experience*. Brown Judaic Studies 211. Atlanta: Scholars Press, 1991.
- Stolz, F. *Ähmes und Israels Krieg: Kriegstheorien und Kriegserfahrungen im Glauben des alten Israel*. Zurich: Theologischer Verlag, 1972.
- Toombs, L. E. "Ideas of War." In *Interpreter's Dictionary of the Bible*, 4:796-801. Ed. G. A. Buttrick. Nashville: Abingdon, 1962.
- Yadin, Yigael. *The Art of Warfare in Biblical Lands*. New York: McGraw-Hill, 1963.

(東北学院大学助教授)